

北海道千歳市（国内 82 例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る  
疫学調査チームの現地調査概要

令和 5 年 3 月 28 日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 農場の周辺環境・農場概況

- ① 発生農場は酪農場や田畑に囲まれた平地に位置し、農場横には川が流れており、農場から 0.5km ほど離れた川の下流域にはマガモ 13 羽等のカモ類計 17 羽を確認した。
- ② 当該農場から約 2.9km 離れたゴルフ場の池には、36 羽のヒドリガモ等のカモ類計 41 羽を確認した。また、農場から約 2.6km 離れたゴミ処理センターでは、100 羽以上のカラスを確認した。
- ③ 当該農場はセミウインドウレス鶏舎 21 棟からなり、北側の鶏舎群 11 棟と南側の鶏舎群 10 棟は、鶏舎群ごとに入口側に設置された内部通路で連結されていた。発生時は 15 棟の鶏舎で採卵鶏が飼養されており、発生鶏舎を含む 13 棟は 1 階建て背中合わせの直立 4 段 4 列ケージ、その他 2 棟は 2 階建て各階背中合わせ直立 4 段ケージが設置されていた。

2 通報までの経緯

- ① 飼養管理者によると、発生鶏舎（通報時 518 日齢）の 1 日当たり死亡羽数は 4～5 羽程度で推移していたところ、3 月 27 日朝、鶏卵や鶏糞搬出口に一番近いレーンの中央付近の下 2 段で多数の死亡鶏（270 羽程度）が認められたことから、家畜保健衛生所に通報したとのこと。また、ケージ内で飼養されている 6～7 羽の鶏が全て死亡している箇所も確認されたとのこと。なお、前日夕方の飼養管理時点では採餌、飲水量及び産卵数に異状は認められなかったとのこと。
- ② 調査時も、通報があったケージとその横方向に隣接するケージやその上下のケージに加え、その背面のケージで多くの死亡鶏、衰弱鶏が認められたほか、鶏舎奥の集卵ベルト周辺には軟卵が複数落下していた。発生鶏舎以外の鶏舎では異状は認められなかった。

3 管理人及び従業員

- ① 農場管理者によると、当該農場の作業従事者は 35 名で、うち 8 名が鶏舎内での飼養管理に従事し、飼養管理の代行要員として 3 名が従事しているとのこと。そのほか、3 名が管理主任、10 名が鶏糞の処理、4 名が選卵作業等、3 名がネズミ対策、3 名が鶏舎の洗浄及び修繕を担当しており、残り 1 名は事務作業に従事していたとのこと。
- ② 8 名の飼養管理者は 1 名当たり 2～3 鶏舎を担当しているとのこと。なお、代行要員の担当鶏舎は決まっていなかったとのこと。

4 農場の飼養衛生管理

- ① 農場の境界の一部（道路側）には柵が設置され、2 か所ある農場出入口は使用時以外、閉鎖されていたとのこと。
- ② 飼養管理者によると、飼料運搬車、従業員の車両等が衛生管理区域に入る際には、衛生管理区域境界にある車両入退場ゲートで車両消毒を行っていたとのこと。さらに、飼料運搬車の運転手など外来入場者については、衛生管理区域専用の長靴、服、帽子を着用し、手指消毒を行って入場していたとのこと。
- ③ 従業員は、衛生管理区域外の駐車場に車を停めた後、事務所にて、衛生管理区域専用のつなぎ、二重のタイベック、長靴、帽子及び手袋を着用し、農場内へ入場しているとのこと。鶏舎に入る際には、鶏舎入口に設置されているすのこの手前で踏込

み消毒（逆性石けんとアルカリ水を混合したものを毎日交換）、噴霧消毒及び手指消毒を行い、外側のタイベックを1枚脱ぎ、鶏舎専用長靴に履き替え、再度踏み消毒を行っていたとのこと。なお、各鶏舎群はそれぞれ屋内の通路で連結されていたが、従業員は担当の異なる鶏舎には通路からは立ち入ることはないとのこと。

- ④ 鶏舎内は自然換気を行っており、鶏舎側面の下部は径20mmのフェンスを挟んで2枚のロールカーテンが引かれており、この時期は常に下していたとのこと。鶏舎側面の上部にはパネルが設置されており、従業員が手動で開閉することで給気の調節をしていた。天井部の排気口（モニター）は屋根に風除板が立てかけられており、30cmほどの隙間があったものの、その上から径20mm及び40mmの防鳥ネットを二重にかけているとのこと。
- ⑤ 鶏舎単位で同一日齢の鶏が飼養されており、鶏舎ごとにオールイン・オールアウトを行っており、オールアウト後は鶏舎内の洗浄・消毒を行い、空舎期間は30日程度設けていたとのこと。農場内の直近の導入は3月20～23日で、当該群には調査時に異状は認められなかった。
- ⑥ 飼料タンク上部には蓋が設置されており、鶏舎内のラインを通して自動で給餌できる構造となっていた。
- ⑦ 飼養鶏への給与水及び洗浄水には、塩素消毒した井戸水を使用していたとのこと。
- ⑧ 集卵ベルトが鶏舎外に出る開口部は鶏舎をつなぐ廊下内に設置されていたため、外部に開口している箇所は認められなかった。除糞ベルトは2、3日に1度程度稼働するが、稼働時を除き、鶏舎外のベルトラインの排出口はパネル等塞いであり、小型野生動物が侵入できる構造とはなっていなかった。
- ⑨ 飼養管理者によると、死亡鶏は毎朝の飼養管理時などに回収してポリバケツに一時保管し、毎日複数鶏舎の分をまとめて死亡鶏回収業者のホイールローダーのバケツに入れて運び、農場内の堆肥舎で鶏糞とともに発酵させていたとのこと。
- ⑩ 管理獣医師はいるものの、3月に入って以降の訪問はなかったとのこと。

## 5 野鳥・野生動物対策

- ① 飼養管理者によると、以前はアライグマやキツネが鶏舎内に侵入することがあったが、鶏舎のフェンスを新しくしたことにより、数年前から見かけなくなったとのこと。一方、堆肥舎内には侵入し死亡鶏を持ち去ることがあり、足跡を見かけることもあるとのこと。
- ② 鶏舎内のネズミ対策としては、専門の従業員を充てて、殺鼠剤や粘着シートの設置をしているが、ネズミはまれにしか捕獲されないとのこと。
- ③ 調査時には、堆肥舎でスズメを確認したほか、農場上空を飛翔するカラスを確認した。また、鶏舎内において、粘着シートに捕獲されたネズミを確認した。発生鶏舎では、前方入口右手の粘着トラップで3匹、隣接する鶏舎との間の通路の粘着トラップで2匹の小型のネズミを認めた。

（以上）